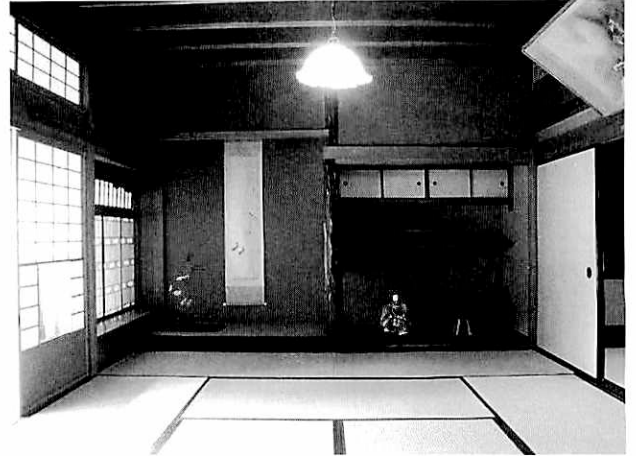


所在地 〒666-0107 川西市下財町4番1号

写真 澤 良雄  
文 東かすえ

正面



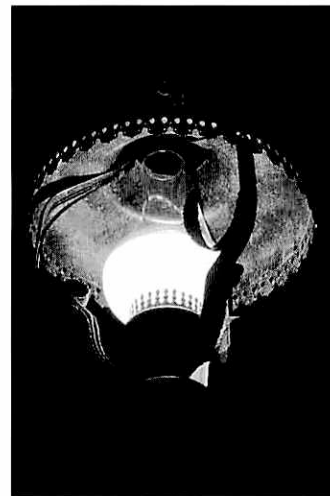
座敷

川西市下財町の新興住宅地に突如として、長い築地塀が現れ、枝振りのみごとな松の大木を擁した屋敷が現れる。現在「川西市郷土館」として利用されている「旧平安邸」である。

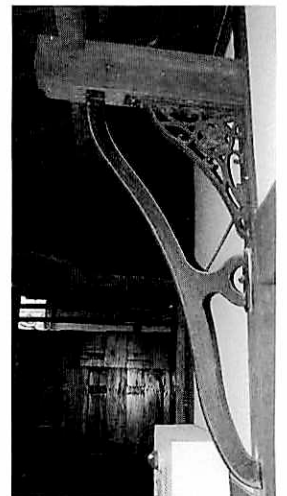
下財町の「下財」とは「鉱山で働く坑夫」の意味であり、この地が桃山時代から江戸時代前期にかけて栄えた多田銀銅山の精練町であったことを地名が伝えている。平安家は昭和10年頃まで精練所を操業して財を成し、大正7年から8年頃にこの住宅を建てた。

中庭を囲み、主屋とはなれ座敷、蔵4棟、浴室が配置され、その外側に米蔵・納屋が一行並ぶ大きな屋敷である。主屋は土間に沿って三間並列に並ぶ六間取りの平面形式をとる。庭に面した屋根の一字瓦葺きや、廊下や縁側の化粧垂木が、数寄屋風である。二本ある一尺角の大きな大黒柱は檜と檜で、屋根裏まで届く長い部材である。縁側に面した大きな開口部には大正期を彷彿させる厚みの一様でない手作りのガラスがふんだんに用いられており、庭との一体感がある。庇下は家紋をかたどった金属製の持送りで飾られていた。

また、当時としては珍しく、各室に異なるデザインの洒落た照明器具が設けられている。これらの電力は平安氏が仲間と共に、猪名川の水で水力発電したものと聞き、スケールの大きさに驚いた。



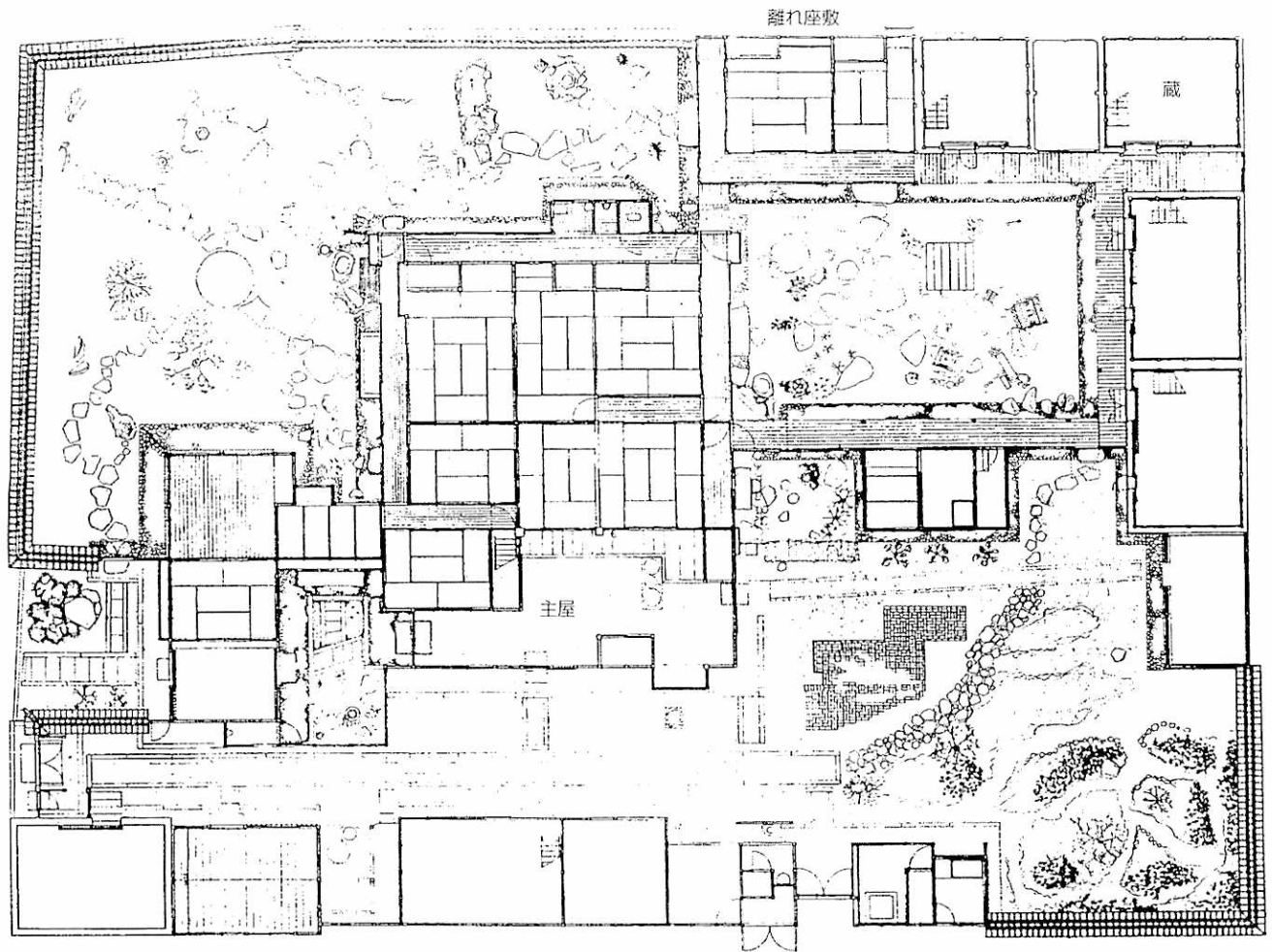
照明器具



金属製持送り



座敷から眺めた庭



随所に高価な材料や近代的な材料が用いられているが、全体から受ける印象は豪奢ではなく、粋である。和室に座り、庭を眺めながら、平安氏の洗練された趣味を感じた。

建物と庭は、今もほぼ大正期のままの姿を残し、堂々たる姿でたたずんでいる。

(参考文献)川西市教育委員会資料



庭から眺めたはなれ座敷・蔵

築地堀：土堀の上に屋根を葺いたもの。  
本来は粘土を築き上げて造った堀。

